

## 人類学よりみたる血液型と性格

### The Blood Type and Character Consideration in Anthropology

齊藤 基生

Motonari SAITO

#### はじめに

本学の教養科目「民族と文化」を開学以来担当し、半期ずつ前後期同じ内容でこれまで計5期講義を進めてきた。初年度の第1期はこちらも学生もお互い手探り状態であったが、3年目を迎えそれなりに講義の体裁が整ってきた。履修に際し、学生の多くがテレビの紀行番組と重ね合わせ、特定の「〇〇民族」についての話を期待してくる。ところが、筆者は民族に関する特定のフィールドを持っておらず、勢い概括的な話に終始せざるを得ない。

そんな中、講義で取り上げる項目の一つに、自然人類学の立場から見た民族、がある。ここでは ABO 式の血液型と民族の関係についても触れる。この時学生に興味関心を持ってもらうために、本人の血液型を聞き取る。と同時に、巷間流布している「血液型による性格判断」がどの程度学生の間に浸透しているか知るため、筆者の血液型を推測してもらっている。

その結果、すべてではないにしろ、毎年何割かの学生は血液型と性格に何らかの結びつきがあると信じている。また、一説には、日本人ほど血液型と性格の関係を好んで話題にする例は諸外国では少ないとのことである。

ここでは、DNA 解析に代表される自然人類学の成果をもとに、なぜ日本では ABO 式血液型による性格判断がもてはやされるのか、ことの真偽を含め、その背景を探ってみたい。

なお、現在は様々な分野で IT 化が進んでおり、学術論文の分野でも活字によらないインターネット版が登場している。しかし、この世界は著作権が確立しているとはいえず、その掲載内容の虚実、独自性、引用の有無をきちんと把握できない。活字世界とは全く異なる玉石混交の情報が跳梁跋扈し

ている。いずれこうした研究紀要もペーパーレスになるかもしれないが、現時点では自らネット社会へ飛び込むにはためらいを感じる。

ちなみに、2004年7月23日16時30分ごろ、検索エンジン Google で「血液型」と「性格判断」の二つの言葉を鍵にアクセスしたところ、約24700件の情報があると表示された。とてもすべてに目を通すことは時間的に無理があり、今回は活字情報のみを手がかりに、それとても決して細大漏らさず網羅できていないが、本稿を起こす。

## 1 血液型研究の歴史

血液型研究の歴史は、古畑種基の『血液型の話』<sup>(1)</sup>や松本秀雄『血液型は語る』<sup>(2)</sup>の中で触れられている。詳しくはそれらにゆずるが、両者を参考にその概要を述べる。1901年、ウィーン大学病理学教室助手のカール＝ランドスタイナーは、22人の健康な人の血液を血球と血清にわけてたがいにまぜあわせてみたところ、ある血清によって凝集される血液と、凝集されない血液があることをみつけた。これは、イギリスの病理学者シャタックが肺炎患者の血球と血清を混ぜると血球が凝集するという報告の信憑性を確かめるために行った実験で判明した。彼は、凝集反応が生理的な現象であり、病気とは無関係であると知る。実験では22人の血液を A・B・C の三群に分けることに成功する。C群は今日のO型にあたる。翌年、デカステロとスターリにより、この三群のどれにも入らない別の一群が発見され、これが今日のAB型にあたる。ランドスタイナーの発見が血液型学発展の基礎となり、彼は1930年ノーベル医学生理学賞を受賞する。

これ以後、新たな分析方法や機器の開発にともない、次々に新しい血液型が発見される。主なものについては後述する。

一方、こうした血液型そのものについての研究の歴史とは別に、血液型と性格を結び付ける研究の歴史があり、心理学者大村政男により丹念に調べ上げられ、かつ綿密にまとめ上げられている<sup>(3)</sup>。大村はその中で、まずは「性格とは何か」から説き起こし、性格診断の展望、性格の類似と特性、体液心理学、と進め、現代血液型性格学に明確な審判を下している。詳細は原著にゆずり、以下この分野の歴史について、要約しながら引用する。

大村によれば、性格心理学の始まりはギリシャ・ローマ時代まで遡る。ヒポクラテスは、人間の体内には黒胆汁・粘液・黄胆汁・血液という四つの体液があり、その均衡・不均衡で健康が左右されるとした。

この考えがローマの医師ガレヌスに継承され、彼は人を黒胆汁質、粘液質、

胆汁質、多血質の四気質に分け、人間の気質と体液を関連づけた。

彼が残した体液論は、神秘主義に拠るもの、体液論を継承するもの、体液抜きで進むもの、の三つに分かれてヨーロッパに伝わる。その一例として、1628年にイギリスの医師ウィリアム・ハーヴェイが血液循環の原理を発見したことに刺激を受け、モリッツ・ホフマンが血液の質と血管組織とを組合せた体液論を発表している。それから約300年後に ABO 式の血液型が発見されたことで、ヒポクラテスが指摘した四つの体液のうち、血液への関心が高まる。やがて、血液型が人種差別の根拠にまでされる。

ところで、ABO 式の血液型四種と人間の性格を対応させたのは、体液と体液心理学の伝統のあるヨーロッパではなく、日本の医師たちが最初であった。1916 (T5) 年、原来復と小林栄により「血液ノ類属的構造ニ就テ」という論文が出される。その中で、兄弟でも血液型の違いにより性格や成績、体格に違いがあることを指摘した。1925 (T14) 年、陸軍の軍医である平野林と矢島登美太の「人血球凝集反応ニ就テ」と題する論文の中で、野砲兵第一連隊の将兵754人の、血液型と階級、身体状況、疾病関係、懲罰経験などを調査し、血液型と性格について分析している。この他の軍医による分析もいくつかあり、実際の部隊編制に応用されたこともある。

そして、ABO 式血液型と人間行動のパターンとの関連についての体系的な研究が、古川竹二によってはじめられる。最初の発表は「血液型による気質の研究」であり、その中で「がんらい他人の気質は、短日月の交際によってこれをうかがうことはできない。それで、わたくしは、まず自分の血縁の人たち11人について調査をしたが、同型の血液型の人ほとんどみな似かよった気質的傾向を持っていることがわかった。そこで数年ないし十数年親しくしている同僚や東京女高師の卒業生など、50人について調査を行ない、ますますその考えが固まったのである。さらに東京女高師や臨時教員養成所の生徒269人についても調査を行ない同一結果を得たので、ここに気質と血液型の間に仮説を立てて発表する次第である」と説明している。そして、さらに他の人の情報を加え、以下のように分類した。

- (1) I 型者 (O 型) は、きかぬ気の人、冷静な人、精力的な人、強い人。
- (2) II 型者 (A 型) は、おとなしい人、心配性の人、不平家、引込思案の人。
- (3) III 型者 (B 型) は、よく気をつく人、世話好きな人、陽気な人、黙っておられぬ人。
- (4) IV 型者 (AB 型) は、II 型的 (A 型) で、III 型的 (B 型) 分子を有する人。

古川は、自分の血族という極狭い範囲の行動観察から成立した原理を増幅し、普遍化しようとした。ここで示された類型が、現代まで連綿と続くことになる。その古川は民族性系数（団体気質）を考案したり、児童の血液型と気質の関係を調べようとしたり、陸軍のある学校で気質研究の調査をしたり、自殺者と血液型の関係についても考察している。そして、一般雑誌へも積極的に寄稿し、『血液型研究』という雑誌の創刊も活躍の場を与え、単行本『血液型と気質』の刊行で自説の普及に努めた。

古川以後、多くの人が様々な立場で血液型と性格について述べているが、個別の分析テーマや結果については大村の著書に任せる。以下、必要に応じ適宜大村の中から引用するが、ブームの旗振り役としてもっとも大きな影響を与えた人物として、次に能見正比古を取りあげる。

## 2 能見正比古の業績

現在までABO式血液型による性格判断が根強く残っているのは、古川竹二の血液型気質相関説を支持した多くの人々がおり、なかでも能見正比古・俊賢親子（以下、能見とは原則的に父正比古を指す）の働きが大きい。彼らの業績に対しては、大村政男が一つ一つ丁寧に検証し、その危うさを指摘している<sup>(4)</sup>。今さらここで能見の業績を検討しても、大村の批判に屋上屋を重ねることにしかない。ただし、大村とは異なる視点から分析するための手がかりとして、手元にある能見の著作を俎上に載せる。

能見は『血液型でわかる相性』<sup>(5)</sup>の中で、「血液型なる語は、最初に血液の中で発見されたために、習慣的に使われている言葉にすぎない。実際は、あらゆる体液にも、細胞臓器にも、骨や爪、歯、髪の毛にまで徹底して行きわたっている型なのである。平たくいえば、髪の毛一本調べても、その人がO型か、A型か、B型か、AB型かが判る。気質が体質によって作られる以上、逆に体のどの部分を取っても、ある程度、気質の特徴が反映しているはずである。しかも、それが、全体に分布している体質の特徴ならば、それは、やはり、もっとも深く、気質を反映していると考えていい。そのうえ、生まれてから、全然、後天的な影響による変化のないもの……となると、現在、この血液型にまさる、よい手掛かりはない。」と述べている。また「血液型で、最重要なことは、それが遺伝するということである。性格というより、気質が親から、かなりの部分を遺伝されるということは、誰でも承認されるであろう。」とも述べている。

揚げ足取りのそしりは承知の上で、いくつか疑問を呈したい。能見は、科

学的に実証されている遺伝の法則を巧みに利用しつつ、この時点で遺伝との関係が立証されていない事柄を、論理を飛躍させながらも遺伝現象であるかのごとく話を進めている。つまり、ABO 式血液型が血液以外でも確認でき、極まれな例外を除き、型が後天的に変化しないのは事実である。しかし、前に引用した「気質が体質によって作られる以上、(中略) よい手掛かりはない」は、仮説に仮説を重ねているにすぎず、自分の思い込みをさも科学的な事実であるかのごとく主張しているだけである。多くの遺伝現象のうち、ABO 式血液型以外は一切他の部位から見つからないのか。だとしたら、体細胞を利用したクローンの作製などあり得ない。

さらに能見は『血液型女性白書』<sup>(6)</sup>の中で、「血液型の違いとは、体の中に化学的性質の違う化学物質が含まれるということである。すなわち体を作っている材料の材質を示すのが、血液型なのである。体の材質差とは、とりもなおさず体質差だ。体質というのは、顔かたちやサイズなど量的な違いでないことは、おわかりであろう。血液型が体質型であるというのは、こういう意味なのである。血液型以外にも体質型というべきものがあるかという、これがほとんど見出されていない。大体、地球上の生物は、種の差を越えて、驚くほど共通の材料から作られている。その例外というべき血液型は、生物体の貴重な体質分類基準である。もちろん血液型には、ABO 式の他に Rh 式とか MN 式など、何十種類の分け方がある。まだ未検出だが、それぞれに型物質があると想像され、体質的特性にも関わると見なしていい。ただ、よく普及している ABO 式に比べ、調査は容易でないだけである。」と述べている。

ここでも、前著と同じ科学的事実と自分の思い込みを絶妙に取り混ぜた論理の飛躍がみられる。そして自身が認める ABO 式以外の血液型のついては、その時点で古畑種基の『血液型の話』が刊行されて20年近く経っているにも関わらず、「よく普及していない、調査は容易でない」として、あっさり切り捨てている。不都合なことから目をそらしているとしか言いようがない。

以上、多作の能見の仕事のほんの2冊でしかないが、その中から生物（遺伝）の分野に関わる発言をみてきた。能見が活躍していた頃と現在では、生命工学の研究の深まりは桁違いで、今の土俵に能見を乗せて批判することは公正ではない。しかし、現在古川・能見説を支持継承している人たちは、最新の研究成果を踏まえた上で発言しなければならない。

赤血球型	血清型	血球酵素型	白血球型
1 ABO	12 Hp	28 AcP	40 HLA-A
2 MN(Ss)	13 Tf	29 PGM	41 HLA-B
3 P	14 Gc	30 ADA	42 HLA-C
4 Se	(DBP)	31 PGD	43 HLA-DR
5 Lewis	15 Gm	32 EsD	44 HLA-D
(ルイス)	16 Km	33 s-GPT	
6 Rh-Hr	17 Pi	34 s-GOT	
7 Kell	18 Bf	35 PHI	
(ケル)	19 C2	36 UMPK	
8 Kidd	20 C3	37 GLO	
(キッド)	21 C4	38 FUC	
9 Duffy	22 C6	39 CDA	
(ダッフィ)	23 C7		
10 Lutheran	24 FXIII A		
(ルセラン)	25 FXIII B		
11 Diego	26 $\alpha$ 2HS		
(ディエゴ)	27 PLG		

表 1 血液の遺伝標識

### 3 生物学的に見た血液型

#### 3-1 血液の型

日本人は、自分自身の血液型を含め、諸外国に比べ血液型についての興味関心は高いといわれている。ところがその知識には片寄りが見られ、血液型といえば ABO 式か、せいぜい Rh 式程度であろう。これは輸血や献血の際に必ず確認されることであり、医療事故等でマスコミに取り上げられる機会が多く、耳目に触れやすい。しかし、一口に血液型といっても、研究の歴史でも述べたように、分析方法や機器の発達にともない、数多くの「血液型」が次々に発見されてきた。ABO 型も数多くの血液の遺伝指標の一つに過ぎない（表1参照）。

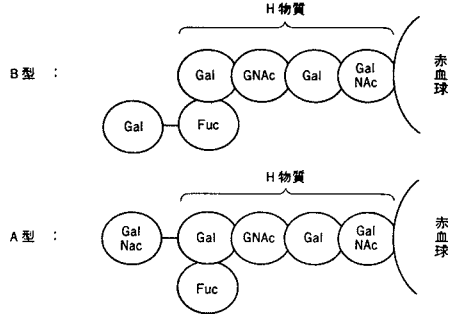
このうち ABO 式血液型は、赤血球が持っている型であり、これを含め血液型には大きく赤血球型、血清型、血球酵素型、白血球型の四つがあり、さらにそれらの中に様々な指標が含まれる。

このような多数の遺伝標識型の中から、ABO 式だけを特別視して性格と結び付けることはできない。確かに最初に発見されたのは ABO 型であり、輸血事故に直結しているのも事実である。しかし、だからと言ってこの型が

人の性格まで左右していると考えるのは明らかに行き過ぎである。

### 3-2 ABO 型を決めるもの

数多くの指標のうちの一つである ABO 型は、赤血球の表面にある糖たんぱくの種類によって決まる。H 物質に N-アセチル-D-ガラクトサミンという糖



第1図 赤血球膜にある ABO 型を決める分子構造

クトースが付いていれば B 型となる (第1図)。両方の糖たんぱくが付いていると AB 型に、両方ともないときは O 型となる。これは能見も認めている。

ABO 型の違いは、たったこれだけのわずかな糖鎖の分子構造の違いでしかない。もしこの ABO 式血液型の違いが性格を決めているなら、特定の糖たんぱくを持たない O 型は、性格の決め手を欠いているか、あるいはすべての型が共通項としての O 型性格を持っていることになる。

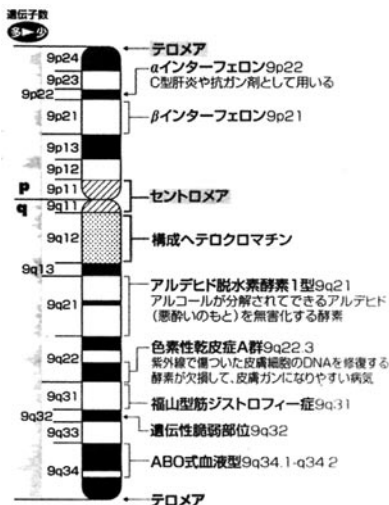
### 3-3 遺伝と血液型

コはオヤに似る、これが遺伝である。数多くの血液の遺伝指標も、その他の形質同様、いずれもメンデルの法則に従ってオヤからコへ受け継がれる。そして、あらゆる生物の遺伝情報はすべて、アデニン (A)、チミン (T)、グアニン (G)、シトシン (C)、という四つの塩基の配列によって記号化され、設計図として伝えられる。

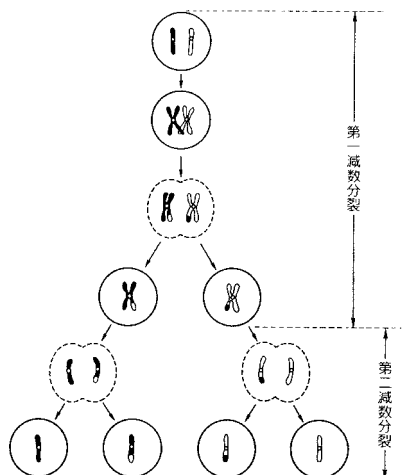
現在、どんな遺伝子がどの染色体のどこにあるか、かなり詳しく解明されている。そして、ヒトには、一口に30億の塩基対があるとされ、それが細胞分裂の際に23対の染色体と呼ばれるまとまりとなって現れる。そのうち ABO 式血液型を決める情報は、第9染色体の長腕下端近くにある (第2図)。ABO 式血液型が本当に先天的に性格を決めているなら、これはまさに遺伝現象であり、四つの塩基によって記号化されていなければならない。

もし仮に性格が ABO 式血液型に連動して遺伝しているなら、次のことが考えられる。

まず第一には、先に触れたように、赤血球表面の糖の鎖の違いがそのまま性格の違いを規定している。さもないければ、ABO 式血液型を決める情報と



第2図 第9染色体模式図



第3図 配偶子形成の減数分裂

一体、もしくは限りなく接近した位置に、性格を決める未知の塩基配列があるはずだ。なぜこうしたことが言えるか。

生殖細胞は体細胞の分裂とは異なり、減数分裂による細胞分裂で配偶子を作る(第3図)。その際、図に示された第一減数分裂の第2段階、染色体が倍化する時、染色体の一部が交差し、遺伝子の組み替えが起きる(模式図の白黒の位置関係注目)。同じ両親から生まれた子どもたちが、一卵性双生児をのぞき、それぞれに似ながらかつ微妙に異なるのはこうした組み替え現象のお陰である。そして、同じ染色体上であっても、距離が離れれば離れるほど、それぞれの情報は別々に伝わる確率が高くなる。

もしABO式血液型と性格に強い結びつきがあるなら、両者の情報は同じ染色体上にあるのはもちろんのこと、どこで組み替えが起きても離れ離れになってはいけない。そうでなければ、ABO式血液型と性格が関係したりしなかったりする。まさに両者が一体となっていることで、初めて連動して遺伝することになる。

残念ながら、今のところこのような事実は確かめられていない。



### 3-4 ヒト以外の血液型

血液型は、ヒトだけのものではない。各生物で独自の型もあるが、他の動植物でも ABO 式血液型は見られる。サル類についていえば、ヒトにもっとも近いゲノムを持つチンパンジーは A 型と O 型があり、B 型と AB 型はない。オランウータンとテナガザルは A、B、AB 型はあるが、O 型はない。ゴリラはすべて B 型、ゲラダヒビはすべて O 型、パタスザルはすべて A 型である。カニクイザルは、ヒトと同じく A、B、AB、O 型の四種類すべてを持つ<sup>(7)</sup>。こうして見ると、ABO 式の型とサル類の進化の度合いとは全く関係がない。

一方、植物でも、細胞表面にある糖鎖にくっつく物質により型が決まる。植物の血液型は O 型が半数ぐらいをしめ、残りのほとんどのものは B 型か AB 型である<sup>(8)</sup>。

大村によれば、古川は人間だけでなく、東京帝国大学農学部の松葉重雄や大沢竹次郎らのデータを引用しながら、「わたくしが人間において得た結果と酷似している。人間における血液型と気質との関係が馬においてもある、ということが並行的に証明された」と書いている<sup>(9)</sup>。

果たして、この見方はより多くの情報が集積されている現在、他の動植物すべてに普遍化できるであろうか。ヒト以外の動植物にも ABO 式血液が存在していることについて、肯定派の人々の見解を知りたいものである。

### 3-5 先天性と後天性

DNA に書き込まれた遺伝子情報は、形質や体質に関するものであり、今のところ性格や気質に関するものは確認されていない。その形質に関する情報、例えば体重や身長に関するものですら絶対的なものではなく、栄養状態により大きく影響を受ける。また、体質についても特定の病気に罹るか否かは、確率の高低であり絶対条件ではない。ましてや性格の形成に遺伝子が決定的な役割を果たしているとは言い難い。

生まれ落ちた時にすでに仕組まれている行動様式を本能と言い換えることができ、生まれ落ちた後で群れや仲間内を真似る（学習）ことで身に付く行動様式が文化である。

例えば、言語をつかさどる機能は生まれつき脳にある。一方、どの言語を母語とするかは生まれ落ちてからの環境が決定する。また食に関し、口から食べ物を取り入れて消化吸收から排泄までの一連の働きをする臓器は生まれつき仕組まれているが、何をおいしいと感ずるかはまさに成育環境により形成される。納豆の好き嫌いも DNA で決められているのであろうか。性格に

関しても、これは生まれつきの ABO 式血液型が決めるものではなく、学習により後天的に身に付くものである。その際、血液型は群れを構成する仲間の DNA から生物として、性格や嗜好はそれとは全く無関係に群れが持つ文化の一部として、伝えられる。

4 血液型当て

はじめにでも述べたように、これまで名古屋学芸大学や名古屋外国語大学の講義の中で血液型に触れる時、学生の ABO 式血液型調査と合わせ、筆者の型当てを行なっている。いずれの学生も必ず一定程度血液型に強い興味を持っており、その多くが性格との関係を肯定的にとらえている。調査を行なう時期は学期が半ばにさしかかった頃であり、講義の進め方などからそれなりに筆者の性格のイメージが固まる時期である。

表2は、大学別、年代別に筆者の ABO 式血液型当てを行なった集計結果である。回答率は必ずしも高くはなく、まとめにくい回答（異なる型を併記）があったり、A と AO を適宜合算するなど、必ずしも実態を正確には反映していないかも知れない。結果は、時には片寄りが見られるものの平均すると、日本人全体の構成比の確率ではなく、四つの選択肢から偶然一つを選び出す確率に近い。合わせて、調査前後で筆者の ABO 式血液型と性格とに対する見方がどうであったか、いくつか具体例を示す。

推察理由

A 型：何となく。何となく A という顔。そう思う。B ではない気がする。外見からは判断できないが確率から A。直感。まめそう。なんとなく色々細かそう。細かい。几帳面。あらゆる面で几帳面そう。授業が丁寧。しっかり授業を進めていてきっちりしている。いろんなア

表2 学生による筆者の推察血液型（左：名古屋外国語大学 右：名古屋学芸大学）

血液型	00前期	00後期	01前期	01後期	02前期	02後期	03前期	03後期	04前期	02前期	02後期	03前期	03後期	04前期	計 %
A	7	14	4	8	3	6	9	6	12	10	6	8	4	8	29.3
B	4	7	3	13	5	6	10	2	7	9	2	4	7	8	24.3
O	8	13	0	12	7	8	5	7	14	6	3	2	3	9	27.1
AB	6	5	3	6	4	5	7	8	3	6	2	4	2	8	19.3

ンケートの統計が細かい。レポートなどものすごく細かく調べている。皆の意見をいつもきちっと打ち出している。出席カードの色が毎週変わる。他人を気にしなさそうで、実は神経質っぽい。

**B 型：**当ててもらえない様なので自分と同じにする。AB より B だから。A ほど生真面目そうではないし、自分（O）とは違う。自分の周りを見ていると B 型に見えたから B 型。マイペースそう。あなたは B です、B 型しかない、絶対 B。

**O 型：**なんとなく。直感。なんとなく直感で。勘。雰囲気的に。自分も O なので O 型の気がする。熱血っぽい。温厚だから O 型。おおらか。人柄がおおらかで結構アバウトな性格に見える。

**AB 型：**なんとなく。以前「いつも聞いているが当たらない」といつたので、皆が書きそうにないのにした。温厚そうでそんなに他人を干渉しない。几帳面な A 型の面と、おしゃべりな B 型の面を合わせ持っている。几帳面なところと適当なところと両方持っている。少し変わっている。統計など細かいこと好きなのに、板書が大雑把。

その他：多分 B ではないことは確か。ような気がする。A or AB、几帳面だが、細かく変わったことまで統計する。A と思うが B でも O でもいい気がする。

### 公表後

- ・血液型 B 型だと思っていたので、AB 型と分かりびっくりした。
- ・見事に外れた。AB とは思わなかったので驚いた。
- ・AB 型とはびっくり。自分の父も AB 型、少しでも似ていると思うと面白い。
- ・AB 型、正直驚いた。まず AB 型ではないと思っていた。自分型のイメージとは違っていた。

推察理由は、いずれも筆者の一面を的確にとらえている。これが曲者であり、「自己成就現象」<sup>(9)</sup>に陥りやすい。そして、たまたま型が合った学生はそのことで ABO 式血液型と性格の関係をより強く信じ、外れた学生は悔しがることはあっても素直に両者の関係のなさをなかなか認めない。一方、懐疑的であったり自分の血液型性格判断を快く思っていない学生（なぜか B 型と AB 型が多い）は、関係なさを好意的に受け止めている。

## 5 まとめ

ABO 式血液型を手がかりに性格を判断することが、いかに困難であり無意味であるか、これまで見て頂ければ明らかである。しかし、肯定派の人がここまでの内容をにわかに承服しないことも容易に想像できる。

肯定派の人からは以下の点について明確な回答を得たい。まづ第一に、ABO の型の違いを決めるのは、赤血球表面に付く糖鎖の構造（構成物質）の違いでしかない（第1図）。この構造のわずかな違いがどう性格の違いを決めているか証明してほしい。また、仮にこの糖の構造そのものは性格の決定に関がわりないのなら、その代わりに ABO 型を決める遺伝情報と一体化した未知の DNA がなければならない<sup>(11)</sup>。第9染色体長腕下端寄り（第3図）に、性格を決定する情報があることを証明してほしい。

ところで、なぜ多くの日本人がこれ程までに血液型と性格の関係をかたくなに信じ込んでいるか、大村が指摘しているように責任の一端はマスコミにある<sup>(12)</sup>。その一つは、思い出したように繰り返し血液型と性格の関係を特集する各種の雑誌であり、今一つはテレビやラジオに出演するパーソナリティーやタレントが何かといえはすぐ血液型と性格を結びつけて発言することにある。特にバラエティーの中でことさら ABO 式血液型と性格の関係を強調する番組は罪深い。さも公平に取材したかのように見せながら、どれだけ恣意的な編集作業が行われているか、分かったものではない。

では、なぜ社会心理学の研究分野で明確に否定され、印刷物として公表されているにも関わらず、肯定派の発言ばかりが目立つのか。

例え ABO 式血液型と性格が無関係なことが事実であっても、それを強調することで雑誌の売り上げが伸びなかったり番組の視聴率が稼げなくては、彼らにとって意味がない。もしかしたら、これほど積極的な理由ではなく、ただ単に勉強不足だけの可能性も高い。いずれにしろ、能見の有象無象の末裔たちが虚偽の拡大再生産を担っていることは間違いない。

話は変わるが、筆者が勉強している日本考古学では、2000年秋に前期旧石器遺跡捏造事件が発覚し、未だ癒えることのない深手を負った。それまで、彼の業績に異議を唱える人があったにも関わらず、彼を「神の手」の持ち主として散々持て囃したのはマスコミである。今、ABO 式血液型と性格の関係を肯定する立場で雑誌や番組を作っている人は、自分が同じ過ちを犯していることに気づいてほしい。

しかし、ABO 式血液型と性格の関係を全面的に抹殺するのも考えものである。例えば、人間関係がこじれた時、本当の理由は価値観の相違や経済力

の欠如や人間的魅力のなさが原因だったにも関わらず、自分の意思では変えることのできない「天与の血液型」による相性の悪さを持ち出すことで、自分の責任を転嫁することができる。生活の潤滑油としての意味ぐらひは、認めてもいいのかもしれない。

## おわりに

本稿を書き起こす前は、世の中の趨勢や学生の反応から見て、ABO 式血液型と性格を結びつける見方が圧倒的大多数かと思っていた。それでも念のために書店で「血液型と性格判断」を手がかりに検索をかけたところ、たまたま目に留まったのが大村氏の著書であった。幸いその書店に在庫があったので、正直あまり期待しないで書棚から探して中身を一読したところ、全く思いもよらない内容であった。そこには、血液型と性格判断に関する研究史が事細かに記され、社会心理学の立場で血液型と性格判断の関係が明確に否定されていた。自らの視野の狭さを思い知らされるとともに、こうした否定派の存在に意を強くし、本稿をまとめることができた。

世の中、マスコミへの露出度合いの大きさが、さも権威であり、優秀であり、絶対正しいかのごとく信じ込まれ、疑うことを知らない善良なる人々を惑わしている例が多すぎる。ABO 血液型と性格判断に関する話題もその典型である。この拙文が、こうした風潮に少しでも歯止めがかけられたらと切望してやまない。

## 注

- 1 古川種基『血液型の話』岩波新書（青版）467、岩波書店、東京、1962年。
- 2 松本秀雄『血液型は語る—親子鑑定と日本人の起源』裳華房、東京、1990年、pp25-40
- 3 大村政男『新訂 血液型と性格』福村出版、東京、1998年。
- 4 大村、前掲注3、pp128-231。
- 5 能見正比古『血液型でわかる相性』青春出版社、東京、1971年。
- 6 能見正比古『血液型女性白書』海竜社、東京、1981年。
- 7 京都大学霊長類研究所『サル学なんでも小事典 ヒトとは何かを知るために』ブルーバックス B-918、講談社、東京、1992年、p41。
- 8 松本、前掲注2、p53。
- 9 大村、前掲注3、pp114・115。

- 10 大村、前掲注3、p38。
- 11 30億対あるとされる DNA のうち、たんぱく質合成に関わる意味のある部分は全体の約5～10%に過ぎず、他は意味のない部分である。
- 12 大村、前掲注3、p73。

#### **挿図出典**

- 1 京都大学霊長類研究所、前掲注7、p41。
- 2 大石正道『入門ビジュアルサイエンス ヒトゲノムのしくみ』日本実業出版社、東京、2001年、p74。
- 3 松本、前掲注2、p14。

#### **表出典**

- 1 松本、前掲注2、p27。

(2004年10月1日受理)